

福岡良明 著

▶ 辺境に映る日本

ナショナリティの融解と再構築
7・15刊 A5判1396頁 本体4800円
柏書房

ナショナリティの構築に 近代日本の学知がいかに関与したか

代表的な言説をとりあげて検証

安田敏朗

本書は、近代日本における諸種の学知が「日本」というナショナリティの構築にいかに関与していたのかを、代表的な言説をとりあげて検証したものである。具体的に本書の構成にそって学問と人物名を列挙すると、「第一部『日本』の均質性／不均質性」では国語学(上田万年、山田孝雄)、方言学(東条操、柳田国男)、ラフカディオ・ハーン研究(雨森信成、田部隆次、丸山学)が、「第二部〈境界〉における包摂／排除」では人類学(坪井正五郎、鳥居龍蔵)、フィノ学(金田一京助、知里真志保)、沖繩学(伊波普猷、柳田国男)が、そして「第三部 ナショナリティの越境／再構成」では、再度国語学(保科孝一、時枝誠記)、社会学・新聞学(高田保馬、小山栄三)、地政学(飯本信之、江澤譲爾、小牧實繁)がとりあげられ、理論を展開する序章と終章が付されている。部構成がしめすように、諸種の学知によって、「日本」という均質かつ固定的なナショナリティが形成されていく一方で、それぞれの学知が、対象に包まれる「境界」をいかようにあつかい、「日本」の均質な時空に包摂していったのかという過程も、ナショナリティの「ゆらぎ」と再構成という概念をもちいつつ、おこなっている。そして、学知の「境界」をさまざまな

す視線が、「西洋」へのまなざしをいやおうなく意識していたことも指摘されていく。むしろ、こうしたことは、それぞれの学知の歴史に関する先行研究においても指摘されてきている。にもかかわらず、筆者が京都大学への博士學位申請論文として執筆し、出版した理由は、先行研究において十分に論じつくせていない点があるからだろう。それはおそろしく、「日本」が「境界」としてどの程度均質化をほかって、とどこもみきれない「残余」が発生し、それが逆にナショナリティの再構成を要求していくというダイナミズムの叙述が不十分だからだとおもわれる。筆者のことはによれば、「構築と融解と再構成を繰り返しながら、ナショナリティは創られ、変容していく」過程、そのなかでの「ゆらぎ」や「絡み合い」の記述が十分ではないといふことなのだろう。そうした筆者の視角は、序章と終章の内容、各章注での先行研究への言及のなかにうかがえる。本書の価値は、近代日本の諸学の配置図をえがいたことにある。そしてまた、「ゆらぎ」のなかでのナショナリティの再構成、いつてみれば「境界」から逆照射する「日本」という視点を提示したことにもあ

る。しかしながら、と評者はおもう。企図や観念としては十分に説得的であり、構図としてもよくまとまっている。だからこそ、ナショナリティの「ゆらぎ」や再構成のありようを、もっと具体的にあらわかにすべきではなかったのかと。先行研究との差異化を一番にはかるべき点について、意欲ほどには結果がともなっていないようにおもわれる。たまたま、評者にとってもっとも論じやすい国語学に限定してみよう。筆者は、上田万年が「西洋」をかがみとして一九世紀末に導入・確立した近代国語学において、「国語」を通じて強固なナショナリティを構築しようとしていた、ととらえる。それが一九三〇年前後の日本の帝國的展開期にあつて、上田の弟子の保科孝一の国家語論・国語簡易化論、あるいは時枝誠記が植民地朝鮮で構想した言語過程観のなかで、従来の強固なナショナリティの核として位置づけられてきた「国語」のありようが「ゆらぎ」、再構成されていた、ととらえている。もちろんこうした観点からみた方がわかりやすい局面でもてく

るだろう。しかしながら、保科にせよ時枝にせよ、多様な「国語」のありかたを認めていたわけではない。それが、「ゆらぎ」ととらえられるものなのだろうか。ナショナリティをよの強化するためになされた議論だとみるのが、妥当なのではなからうか。あるいはまたおもように、筆者は均質なナショナリティがうたがうてこのない前提として設定可能だととらえすぎてはいないだろうか。ナショナリティなるものをどう定義するかが不明ではあるものの、それは「日本」だろうが「境界」だろうが、「ゆらぎ」つつけるものでしかないだろう。近代日本が内国植民地・植民地・占領地などとその影響圏を拡大していくなかで、そのような経過をたどらなかつたことは困難であろう。こうした点は、帝国日本という範圍を設定し、その内部の多言語状況への顧慮などといった相互影響関係のなかで言語論(国語論、方言論、日本語論)は種々の変容をみせてきた、といったことを、評者はいくらか論じてきたつもりである。

もちろん、これは評者の読解力不足による難癖にすぎない。評者の力のおよばない学知に対して本書のあたえる衝撃も多々あるはずである。ただやはり、「ゆらぎ」、再構成されるナショナリティというフレーズがくりかえされているが、この視角の導入が一体どのような意味をもつのかを、具体的に今後しめしていくつもらいたいと願っている。

(近代日本語史)